





# 審査結果報告書

2020 年 1 月 7 日

主 査 氏 名 三 枝 信 

副 査 氏 名 隈 元 博 幸 

副 査 氏 名 石 山 博 康 

副 査 氏 名 田 邊 聡 

1. 申請者氏名 金子 亨

2. 論文テーマ : Influence of cholangitis after preoperative endoscopic biliary drainage on postoperative pancreatic fistula in patients with middle and lower malignant biliary strictures.  
(中下部悪性胆道狭窄例における術前内視鏡的胆道ドレナージ後胆管炎が術後膵液漏に与える影響)

3. 論文審査結果 : 胆膵癌の根治的療法は外科手術であるが、高度黄疸例では肝機能低下、易感染性、出血傾向等による耐術能がしばしば問題となる。このような症例には術前胆道ドレナージが施行され、その有用性が報告されている。一方、術前胆道ドレナージ後の術前胆管炎が術後合併症である膵液漏の発症に関与するとの報告もある。そこで、申請者は、中下部悪性胆道狭窄例で術前胆道ドレナージが術後膵液漏発症に及ぼす影響について検討した。対象は、2004-2013年に北里大学東病院で施行された中下部胆道狭窄を伴う悪性腫瘍の肝切除を施行しない手術例のうち、術前胆道ドレナージを実施した102例で、術後膵液漏発症に寄与する可能性のある因子を後ろ向きに検討した。その結果、33例に術後膵液漏を、56例に術前ドレナージ後胆管炎を認め、両者には統計学的に有意な関連性が認められた( $p=0.001$ )。また、胆道癌では膵癌に比べて有意に膵液漏の発症が高かった( $p=0.005$ )。多変量解析で、術前ドレナージ後胆管炎および胆道癌が、術後膵液漏発症の独立した危険因子であった。加えて、術前ドレナージ後胆管炎の発症に、総ビリルビン値  $2.9\text{mg/dl}$  以上、手術待機期間 29 日以上が独立した危険因子であった。以上から、申請者は、術前ドレナージ後胆管炎の防止は術後膵液漏発症の抑制に繋がるとの結論に至った。公開審査では、申請者は主論文の内容について約 20 分にわたり詳細な発表を行い、その後の審査員からの多種多様な質問についても適切に答えることができた。審査員は、学位論文の内容の高さ、質疑応答の的確さから、医学博士の学位に十分値する判断した。